



桐間紗路の妊娠・出産

「ふわあ……送ってくれて、ありがとぅございまふぅ」  
「ふふっ……どういたしまして……お礼は、そうだねえ……」  
「だらしなくベッドに無防備に横たわるのは桐間紗路ちゃん。  
お嬢様学校に通っている特待生。だけど、  
お家はちよつと貧しくて、ブルール・ド・ラバンというお店で  
バイトしている。」

「ふわあ」  
「ふふっ」  
「あらしなく」  
「お嬢様学校」  
「特待生」  
「貧しくて」  
「ブルール・ド・ラバン」  
「バイトしている」

「ふわあ」  
「ふふっ」  
「あらしなく」  
「お嬢様学校」  
「特待生」  
「貧しくて」  
「ブルール・ド・ラバン」  
「バイトしている」

「ふわあ」  
「ふふっ」  
「あらしなく」  
「お嬢様学校」  
「特待生」  
「貧しくて」  
「ブルール・ド・ラバン」  
「バイトしている」

「ふわあ」  
「ふふっ」  
「あらしなく」  
「お嬢様学校」  
「特待生」  
「貧しくて」  
「ブルール・ド・ラバン」  
「バイトしている」

「ふわあ」  
「ふふっ」  
「あらしなく」  
「お嬢様学校」  
「特待生」  
「貧しくて」  
「ブルール・ド・ラバン」  
「バイトしている」

ポッ





「きついでしょう？パンツも脱ぐと楽になるよ♡」  
「あつ……ありがとうございまふう」

大事な秘部を男のボクの眼前にさらしても全く気にすることはなく、シャロちゃんも、ボクにされるがままだ。

あっ♡

すでにボクの股間はパンパンに張り詰めていて、射精寸前まで勃起している。

「さて……と」

「ふあ？なにをするの？」  
おもむろに全裸になりだすボクを見て当然の質問だ。

「とつても気持ちのいいマッサージを  
してあげるよ♡」  
今日の疲れなんか、すぐに忘れちゃう  
くらいね♡」

ペニスをポロリとむき出す。  
天井に向けて痛いくらいに  
突き立っていて、さきばしりの  
汁が垂れている。

「そうならあ……んっ♡」

オマンコにペニスの先端をあてがっても、  
何の抵抗もない。

「いくよお……はあはあ……それっ！」

軽い膜の抵抗を先端に感じたが、ボクのペニスは滑り込んでいった。  
シャロちゃんの膣内に滑り込んでいった。

スルルッ



「はあっ……ち、力を抜いてねっ！」  
「んっはあぁんっ♡  
これえ、なんれずかぁ？」

「んひっ♡きっつきっつオマン」が  
チンチン締め付けてきている！」

「おちんちんがはいってるのお？」  
「つい素直に感想を言ったせいで、  
マツサーンではないことは明白。  
だけど、判断力が低下している  
せいか、シャロちゃんか  
気にしている様子は無い。」

「そ、そうだよっ！」  
「シャロちゃんのオマン」に  
チンチン入っっちゃってるんだよ！」  
「そうならあ……んっ」

「き、気持ちいい？」  
「んっよくわかんない……」

「じゃあわかるように  
動いてあげるからねっ！」

「んっ♡ふぁあぁん！」

「腰を動かし、ペニスをさらに  
膣内に埋め込んでいく」

「艶めかしい声をあげて、  
ボクのペニスを膣内で感じている。」

「気持ちいいんだねっ！」  
「あっ……もう出そうっ！！」

「お腹の中に、熱いの注いで  
あげちゃうから、受け取って！！」  
「んっ……ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

ボクは射精をするために、腰の動きを早める。

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」

「んっ♡ふぁあぁん♡  
はあんっ、ひっ♡」



「はああ、はああっ！射精すうっ！  
シャロちゃんのオマンコの中かにつ……  
子種送り込むっ！」

本能の赴くまま精液を送り込む。

「あっ……熱いのお腹にきたあ♡  
中にひろがつてきてるう……ふあああ」

「孕めっ！ボクの赤ちゃん孕む  
くらいにつ……子宮にザーメン貯めこんでっ！！」

思っている本音を精液のたぎりと一緒に  
子宮にぶつけた。

「ふあっ？あ、赤ちゃん？  
それつてえ……でもお  
気持よくてえ……  
よくわからないあい♡」

「今はわからなくなっついていいよお……はああ、  
結果はすーつとあとでっ……んっ！分かるんだからあ♡」

シャロちゃんははされるがままに  
素直にボクの射精を受け止め続けるのだった。



「あああつ……いつとばいつ……でたよお♡はあはあ……」  
「ふあつ……はあんっ♡」  
引き抜いて、結合部分をしっかりと見つめていると、奥から精液が溢れだしてきた。

「シャロちゃんのはじめて、もらっちゃったねえ♡」

男のものを始めて受け入れた証、破瓜の血が精液と入り混じって流れ出ていた。

「もう、こうなったらシャロちゃんをボクの恋人にしちゃってもいいよねえ？」

「こい……ひとおっ」

「そうだよお、いいよねっ!!」  
「いいれすよお……ふにゃ……」

「しっかりと聞いたよお……今日から僕たち恋人同士だね……んふふっ!!」

「んっ……」

いつものまにかシャロちゃんはかわいい寝息を立てていた。

「ふふっ……これだからが楽しみだなあ……今日には十分満足したよ。じゃあ……またね」

ゴボッ  
んっ

これからのことを考えると楽しみで仕方ない。次に逢う時のことを想像をふくらませながら、今日のところはシャロちゃんの寝顔に別れを告げた。



「コーヒーマイ状態のシャロちゃんはエッチに積極的。  
「んちゅうら♡んむっ……はむおっ」  
「んっ……にゅむっ……ふむんっ♡」

「ディープリキスで舌を絡めつつ、シャロちゃんの体温を感じながらオマンコを突き上げるのは最高だ。ついつい、長くつながつていたくなってしまう。」  
「ん……ふむんっ……んん!? ふっ……んぶふう!」

「そのおかげで、シャロちゃんのコーヒーマイが切れかかっているみたい。時すでに遅し。このまま素の状態に戻ったシャロちゃんのリアクションも気になることだし、気にせずボクはセックスを続ける。」

「霧が晴れるかのように、意識が元通りに覚醒してきます。頭のモヤがとれてくると、目の前には私を覆い尽くすような大きな影。」

「下半身は熱いものが入っています。違和感と、不思議な感じが湧き上がってきました。違和感と、

ジュルルッ

ムクッ

おっ

ズッ

アッパッ



「んむっ!? はぶらっ!! こ、これは……なっ!?」  
「おはあ正気に戻ったね。でも、やめないよお……」  
「このままスズンッッって、オマンコの奥をつついてあげるから♡  
キスだって、このまま、んじゆるっ♡」

「ふふっ……んっ!!」  
「あらめあうのような共同作業から一転して、今度は一方的に  
蹂躞するようにシャロの口の中を舌でかき回す。

「ふくくっ……んぐっ!! おほっ……」  
「あっ……いきそうだっ はあはあっ」

「中に出すよお! いつものように……子宮でボクの子種受け止めてっ!」  
「んっ・うっぐっうっうっうっ!!」

「んむっ!!」  
「んぐっ!!」

ズッ  
ズッ  
ズッ

お!!

おぼお……

私ははつきり意識が覚醒してました。  
下半身は目の前の男の意識が覚醒してました。  
曖昧な夢だと思っただけを飲んでたことは、すべて……

一瞬間、男の人は全くやめてくれる様子もなく  
洗い呼吸したと思っただけは再びうめつくされて、  
下半身が激しく動きだします。



「おっ……ほこおおお♡ んっおおお♡」

「はあっ！身体はおチンポを……今までの快楽をよーく覚えてるようだね？ んっ……オマンコがキュって痛いくらいに、チンポ締め付けてきてるよ♡」

「んあっ……こんなっ！いやらあ……ひやあ」

「シャロちゃんの嫌がる声を聞きながら容赦なく射精！ お腹の中に精液を解き放つ。」

「あああっ……あつたがあい精液がお腹の中に入ってくるのわかるかい？」

「おっ……ほおお♡ こんなのおだめなのにい……身体が悦んでりゅう……ふう……くうううう♡」

おっ♡

ほおお……

ぐわんぐわん

ぱんぱん

勝手の私の意思とは無関係に身体は  
下半身に反応していきま  
手が知らぬ間に……身体がしつかりと覚えてい  
睦手が下半身の異物が……キツクつと震えだすと  
下半身に浸るものが溢れだし、  
消え去る理性は押し流されるように



「あっ……ああ……」

「はあはあ……今日もまた、たっつぷりと

子種をシヤロちゃんの中に送り込めたよお♡」

「ご、こんなに気持ちいいのお……」

「んふふう……よかつたたろうう？これで終わりじゃないよお……」

「もっっ……にげられにやい♡もっとお……もっとしてえ」

完全にコーヒーが抜け切れてはいはないのか、  
身体のテンションに引きずられて、思考の方も  
すっかりエッチに順応したみたいだ♡

男の人に抵抗しようとする意思もすっかり  
消え失せてしまった。  
このままずっと浸っていたい……

快楽を喜んで受け入れる身体に  
心のほうを合わせてしまえばいい……  
そうすれば幸せになれるだろう……

そう思うのに、時間はかかりませんでした。



「んっ……学校に、遅れちゃうからっ！いい、今はもうやめてくださいっ！！ひうっ……んっ♡」  
「大丈夫っ、も、もう少して……でるからねっ……ああ♡」  
「昨日、一晩結合してそのまま、おうちにお泊り。  
起きてみたら、登校直前の制服姿のシャロがいたので、  
ムラムラっして襲いかかってしまった。」

「ああっ……もうすぐうっ……でるからっ！！  
んっ……ふうっ！くふう♡  
寝ているうちに作られたボクの精子、  
たっぷり子宮に溜め込んでいつて！」  
「ひいっ！！そ、そんなの……だめえ」

「寂しくないように、ボクのこと学校で  
考えっぱなしになるようにっ！！」

「ひい……ひいやっ！……あああっ！！」

「溜まった精液を絞りだすように  
一心不乱に腰を打ち付ける。」









「はあ……あーっ！いつばいでたあ♥」

「ひんっ……んっ！」

すっかり精液を吐き出し尽くした。満足したボクは柔らかくなってきたペニスを腰からスルリと引き出す。ごぼりと音を立てて、精液が溢れだす。

「あ……さっそくごぼれてきちやったよお……」

大丈夫、ごぼれた分も、そのままパンツあげれば、無駄にならないね♥」

中途半端に下げるだけだったパンツを引き上げ、しっっかり付け直させてあげた。

トロッ  
ゴッゴッ

「あっ……いい、嫌あ、パンツ……取り替えさせて……」

「もったいたいからダメだよお？」

あ、あとオマシコにキユツと

カ入れてこれ以上零れないようにするんだよ♥」

「あっ、時間……も、もう行かなきゃ……」

「ふふっ、結局替えないんだねえ……」

いつてらっしやあい♥」

結局パンツを取り替えることもできませんに  
ふらふらした足取りで、シャロは学校へと向かう。







お客さんの姿もまばらな時間帯、とあることを実行しようとシヤロを招き寄せる。

「ひっ!!」それはやめて……」

なにをさせようとしているか気づいたシヤロは軽い悲鳴を上げたが、ボクはそれにかまわず、

「オチンチン啜えて! ほらほら、ほかの人に

気づかれないうちに、すぐ射精しちゃうからさ!」

シヤロがませると露出していたペニスを回元に押し当ててる。

「んむっ……はむっ、ちゅむ……くむっ」

観念したかのようにシヤロは口を開け、

ペニスをちゅばちゅば吸い始めた。

「おう……この誰に見られるかもわからない

緊張感の中でフエラ……

すごく興奮して気持ちいいッ!!ふはあ♡」

「んっ……ちゅもっ!ぬむっ」

おんっ  
ふっ  
んっ  
んっ  
んっ

「シヤロちゃん、積極的……ほおお♡  
で、出るう♡お口の中のほうがいいよねっ  
制服汚すとバレちゃうし……」

「ふあ、ふあい……んぶっ……すぶっ」

「よおし、いくうっ!! お口でッ!お口のなかで受け止めてっ!!」

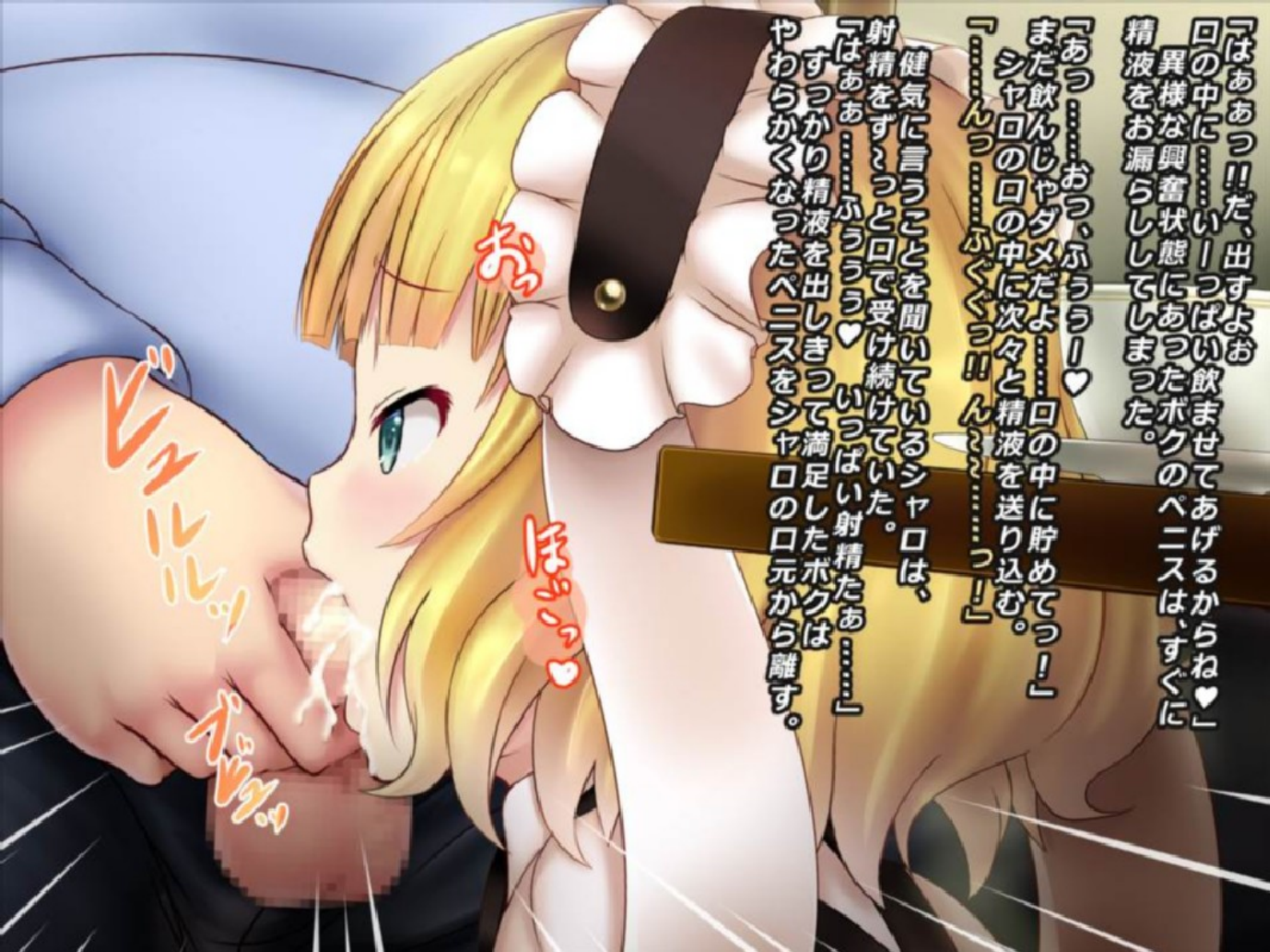


「はああつ!!だ、出すよお  
口の中に……いっつばい飲ませてあげるからね♥」  
異様な興奮状態にあつたボクのペニスは、すぐに  
精液をお漏らししてしまつた。

「あつ……おつ、ふうらー!♥  
まだ飲んじやダメだよ……口の中に貯めてっ!」  
シヤロの口の中に次々と精液を送り込む。  
「……んっ……ふくぐっ!!ん……っ!」

健気に言うことを聞いているシヤロは、  
射精をすゝつと口で受け続けていた。

「はああ……ふうらう!♥ いっばい射精たあ……」  
すつかり精液を出しきつて満足したボクは  
やわらかくなつたペニスをシヤロの口元から離す。











「はい、じゃあごっくんしていいよ♡」  
「んっ……ごっくん……んっぐらっ」  
ポクの合図で、喉を鳴らし、  
懸命に粘り気のある精液を飲み下す。

「うっ……んむっ！」  
「二度には全部飲めなかったかな？それうらうときは  
つばをもっと出して精液と混ぜるといいよ」  
「んっ……あむ……んむっ……ごっくん！」  
モゴモゴと口を動かし、唾液と精液を混ぜながら、  
シャロは精液を何度も飲み込んでいった。



「全部きちんと飲めたかな？お口の中見せて……」  
「ふあい……んあ」と

大きく開いた口の中には、すっかり精液が消え去っていた。

ふあ、

「おお、すごい！すっかりキレイになったねえ……」  
舌がはつきり見えるよ」

「ご、これで……もういいでふかあ？」

「んっ……満足満足！  
お仕事頑張っでね！」  
「ふあい……で、では失礼しますう……」

ふらふらした足取りでシヤロは厨房のほうに  
引き下がっていった。だが、再び現れた時には、  
多少のきこちなさを残しながらも  
愛想笑いを取り戻していたのだった。



「あゝ……そうそう……もつとペロペロしてっー」  
「んっ……レロレロ……んちゅ……にゅむう」  
「シャロにフエラをさせながら、ポクは  
膣の中に指を差し入れた。」

「ごめんねえオチンチンではオマンコ  
気持よくさせられなくって」  
「……んっ、ふむう……」

「でも仕方ないよねっ!!  
だって、お腹にはポクたちの大切な  
赤ちゃんがいるんだからさー」

ポクの言葉を聞いてシャロの  
身体がビクンツと硬直する。  
妊娠が判明したのはごく最近。

「気持ちよくなるだけなら、  
ポクの指でしてあげられる。  
ほーらあ、ここがいいんたるうっ」

ちよつとコリツと固くなっている  
ところを優しく撫でるようにする。

「ふっ……っ!!んんん♡  
らめえ……はんんー!」

フキッ  
フキッ



「すておい……お潮吹いてきたねえ」  
「んっ……ふうっ♡……っ!!ふむうらうら♡」  
「このままいつちやおうか、あ、でも、母体に負担をかけると  
赤ちゃんにも影響があるかな?」

ピタッと指の動きを止める。

「あっ……そ、そんな」  
「あれ?もつとしてほしい?」  
「っ!!そ、そんなことはあ……はあ、あっ」

アッ

ニッ

っ♡

ビッ

ビッ  
ビッ

ビッ

「イかせてあげられないけど、  
寸止めなら何度でもしてあげるよ♡」  
「あっ……っ♡ はああっ……  
っくうらうら!!」

絶頂の寸前に寸止め、  
身体が落ち着くのを待つて、  
指でGスポットを撫で回し、  
再びイきそうになると止める。

「んっ……ふぎいっ♡んっ……くふうら♡」  
何度も何度も、絶妙のタイミングで  
イかないように繰り返す。



「ほおお……んっほおお♡  
も、もうイかせてえ……」

「あはあ……ついに懇願きちやつたねえ♡」

きゅううつと痛いくらいに指を締め付けて、膣は痙攣寸前だ。

「こめんねえ、まあ精液注ぎ込まなきゃだいたいじょうぶかな？」

ボクとシャロちゃんの子供たもの  
このくらいじゃ全平気だよね♡

いつていいよ！ 気持よくイかせてあげろっ！  
寸止めせずに最後まで指を動かし、絶頂へ到達させる。

おおっ

ほおっ

ほおっ

「あひら♡♡いくらいツぐううららん♡」

シラフなのに、まるでコーヒハイの  
ときのようなとろけた笑顔を披露してくれた。

「ママになるっていうのに、快樂には勝てなかったね♡  
子供がお腹にいても、我慢することなく  
いつばい気持ちいいことしていこうねえ♡」

「すりゅう♡♡ おほっ……おほっ！

きもちいことお……するの♡♡  
おおっ……んおおっ♡♡」

ぐわっ

ぐわっ

ぐわっ

ぐわっ

ぐわっ

ぐわっ



んっ  
んっ  
ジュッ  
ジュッ

「はあ……はああっ！  
ボクもっイくからねえ……  
子宮に届けてあげられなかつた精液、  
しつかり赤ちゃん栄養にしてあげてっ！」

「んむっ……わかりましたあ♡……ちゅまっ……  
くふぶっ……んくっ」

チュパチュパ吸い付いて精液を飲み下していく。  
お漏らししているようにつきつきに愛液が溢れだして  
シートに染みを作り出していた。

ジュッ  
ジュッ  
♡



「ボクの私物のカップだから遠慮せずに……おしっこしていいよお♡」  
「そ、そんなこと言われても……んっ!!」  
「……でませっ……んっ!!」  
それにこんな……汚い……んっ!!」

「妊婦に良いマタニティ・フレンドの紅茶飲んでいるシャロのおしっこなら……それに飲尿は健康法のひとつでももあるし、体に悪い要素なんて……」  
「ひっ……ひいやあ……」

あそこをひくひくっつと一生懸命震わせているけど、緊張や羞恥心が邪魔しているんだろう、出る様子が無い。

膨らみ始めたお腹に膀胱も圧迫されて、でやすくなっているから、このまま待っているでもいいけど……

さすがに忍び込んでいるフルール・ド・ラパンから、早めに済ませて出たい所だから……





「もう、待ちきれないからよお……  
こうなったら強制的に出させちゃうぞお♡」  
「ひやああっ!?だ、だめええ♡」

ペロペロとオマンコに舌を這わせる。  
力を抜かせてやれば、自然と膀胱も緩むはず。

「おあ、愛液のほかに……  
ちよつとしよつばいながらも、  
ハーブの良い香りが……?」

「い、いやあ……  
も、もうだめえ!  
これ以上はっ!」

「おほお……  
でてきた……  
あつたかいおしっこ  
あふれてきたよお♡」

「あああっ……でちやうど  
我慢……できな……  
でちや……ふうっ、ふうっ、ふうっ」





「あああっ！  
しちゃってる  
私……お店でえ……」

一度放つてしまうと、もう途中で  
やめるのは容易ではない。止めどなく  
おしっこは放たれ続けた。

「おつとおつ！  
なるべくテーブルは汚さないようにしなさいと  
カップはここだよお♡」  
「とっ……止まらない……はんらんっー  
ああ……いっばい溜まってらっつてえっ」

「いっばい出るねえ……  
カップから溢れないか心配になっちゃうよお♡」

「やああ……あっ……ああ」

おしっこをすっかり出し尽くした  
シャロはしばらく呆けたまま、テーブルの上で  
座りこけていた。

「あああ……しよっぱいけど、ハーブの香りの  
生ぬるさがまた……」  
ポクはしっかりとシャロ由来のお茶を堪能した。

チロロ〜

ぽく

ぽく





ーコーヒーハイテンション状態ー

「ここにすればいいんねえ？」

「そうだよお♡でも、ちよこつと小さいから  
気をつけようね」

「はあい♡それえ!!んっ……んふらうー!」

恥ずかしげもなく放尿するシャロ。  
コッピリのちからは偉大だ。  
(ちなみに適量のカフェイン摂取は  
妊婦にも問題はない)

チヨロロ

「おつとおつだ、だめだよお……  
あんまり動かさないで!」

「ええとらういいてないれすよお?  
んふらう……おしつにするの  
気持ちいい♡」

「あっ! ああもう……!」

下半身がふらふら動いて、  
盛大にテールを汚してしまう。  
後始末が大変だった……



チヨロロ

チヨロロ

チヨロロ



「おっぱいはそろそろ出ないかなあ……  
もう出ても……んっ  
いい頃だよねえ!  
ちゅむっ……じゅる!」

「んっ……それは  
あ、赤ちゃん  
産んでからじゃ……」

「すんすん……  
そんなことない  
と思うよお?  
だつて、ミルクの  
甘あい匂いが  
おっぱいから漂  
つてくるんだもん!」

「ふうっ……匂い、なんてえ」

「シヤロも残りのおっぱい  
揉んでみてみなよお!」

「んっ……はあっ……  
でてないもん」

「あっ……はあんっ」

最近では母乳が出てくるのを期待して  
ねちっこく乳首に刺激を  
与えるのがセックス時の日課になっていた。





「お、おほお？これは……」  
「口の中に甘い液体が  
じわりと染み込む。」

「あはあ……」  
「あつぱりおっぱいだあ♡」

「ひやつ！？う、うそお!!  
ま、まだ赤ちゃん  
産んでないのにい」

「はは、一足先にママに  
なっちゃったねえ♡」

「はああつ……で、出ちゃうっ  
す、す……あ、溢れてるっ  
す、す……あ、はあ」

自分で揉んだ乳首から  
どんどん溢れてくる  
母乳に驚くシヤロ。

揉むたびにビュツビュツと  
勢いが増しているように思える

「ああ、すごいよお……  
興奮してきたあ！  
はあつ……」  
もういきそうだあ♡」

勃起したペニス  
射精が近くなつてくる。  
このまま中に出すために  
腰の動きを早めることにした。

アッ

ズッ

あつ



「はああつ……あゝあゝあゝ  
母乳ごくごく飲みながらの  
射精最高つ♡」

「あつ……はああつ!!  
あゝ熱いのつ……  
きてりゆう♡」

「おっぱい出てるのにい……  
ママの悦びと女の悦び  
どうじにきちやつてる  
はうらうんつ♡」

「シーツに母乳を  
撒き散らしながら  
シヤロも絶頂。」

「ああ……はああ……  
きついくらいにペニスをぎゅって  
締め付けられて……  
部屋中に漂う甘い  
匂いに囲まれながら  
射精は最高だよおら♡」

「いやあ……  
また新しい快感  
知つちやたよお……  
はああ♡」

「思いの外シヤロも  
気に入ったようだった。」

ビュ〜  
ドビュッ  
ブビッ

じゅるる

ほあゝ

あゝ





「んむ……んっ  
すっかりぐしよくしよに  
なっちやつたね♡」

「はぁ……はうら♡」

「いつばい出せば  
出すほど、どんどん母乳つて  
つくられていくらしいから  
毎日吸いだしてあげるね。  
出産した後には  
しっかり赤ちゃんに  
あげられるように♡」

「ひゃうっ……そんなあ  
これからすっつと吸われちゃうのぉっ」

「吸われるのに慣れておけば、  
赤ちゃんに上手に  
おっぱいあげられるかもよ♡」

「んっ……それならあ  
しかたないかもお♡」

「んっ……まだ水つぼさが  
あるねえ……これから  
どんどん濃くなつて  
くるのかなあ？  
楽しみだねえ♡」

身体の明確な変化を感じて、  
出産への期待はますます膨らんできた。





「ああ……早く特製ミルクティーが飲みたいなあ  
カップに注いでよ。ほらあ」  
「やんっ、だっ……だめえ!!」

何度目かのフルール・ド・ラパンへの  
エツチ目的での侵入。  
店長からの信頼厚いシヤロは、  
バイトを一時休業中でありながら  
復帰可能になったときのため、鍵を預かっている。

「ボクのおチンポミルク  
オマンコに注いであげるからあっ  
それと交換ねっ♡」

「はんっ……あっ!!  
お店でこんなことお……もういやあ」

「んふっ……何度もこっさりしてきたでしょうっ  
大丈夫だよっ!!」

「ひゃらんっ……ああ……」



はっ

あっ

もみ

もみ

んっ

んっ



「こ、こんなのダメなの……に……」  
「んふっすっごい勢いで母乳でたあ♡  
ボクの方も、マンコに精液注いでっ……あけるよおー！」

腰を振り、つきだしたお尻に向かって腰を振り、  
溜め込んでいた精液を膣の中に送り込む。  
「ああっ……あ、赤ちゃんがトントントンしてるう……  
ダメなお母さんでっ……ごめんんさいいっ♡」

膣をひくひくっとなさせ、しっかりとペニスをくわえ込んで  
精液を受け止める。

「はあはあ……たっぷりと母乳の注がれた  
栄養満点のミルクティーができそうだねえ♡」

「ああっ……精液悦んでる♡  
赤ちゃんが悦んじやってるう♡」





「赤ちゃん起きてたんだねえ  
エッチなママのこと、どう思ってるかなあ」

「そ、そんなことお……い、いわないでえ♡」

「しっかり赤ちゃんにいったこと伝わってるよね♡  
オマンコがビクビクって、今もまだ痙攣してるよ♡」

「うっ……はあ、あっ……」

「母乳もいっぱい注げたね♡

「できたらなんて言うんだっけ？」

「あっ……ご、ごめっくりお召し上がり

「くださあ……い♡」

「はあい♡んっ！」

日に日に濃くなるシャロの母乳が

たっぷり入ったミルクテイを

幸せいっぱい堪能することができた。

あ、

あ、

うっ

ドロっ





「コーヒーハイテンションで搾乳ー」

「あんっ！オチンチン気持ちいいっよお♡  
もっとおっぱいも絞り出してえ♡」

「いっぱい感じちゃっていいよっ！  
オマン」も胸もいっぱい気持ちよくなっちゃえ♡」

「ああっ！赤ちゃんがあ……はっっ、お腹の中から  
トントントって……してきてるっ♡」

「赤ちゃんもママが気持ちよくなるの  
手伝ってくれてるんだねっ♡」

「んっエッチなママでごめんねえ♡  
気持ちいいのやめられないのっ！」

母乳を撒き散らしながら、  
後ろから突かれ絶頂する。  
最高に淫乱なメスの姿がそこにはあった。





陣痛が始まって破水が起こって  
からもうどれくらい経つただろうか……

「ひっ……ひん……ふうふう……」  
「ああ、もうすぐ赤ちゃんが生まれてくるんだね  
すごく楽しみだよ」

子宮が収縮し、赤ちゃんを押し出そうとしている

「ああ……こんなところでえ……ふううう  
赤ちゃん……っ産むなんてえ……」

「ボクたちの出会いの場所だもん、  
お似合いのところだろう？」

「んっ……ふくっ……あああっ!!」

陣痛の間隔が次第に短くなり  
痛みは増していくようだ。







「ああ、もう我慢ができないよっ」

おもわず羊水を舐めとりながら、  
膣を開いて、中の様子を確認してしまう。

「はああっ！だめえ……」

「早く出ておいでえババもママも  
キミに逢えるの楽しみに  
してるんだからね♡」

そんなことをしていたら、次第に  
頭が産道を通ってぼっこりと恥丘を  
膨らまし押し上げはじめた。

「んっ！！ひっひっ……ふうううっ！！  
はあっ……ああっ！お腹の中……  
ごりごりされてるぅ♡」

ぷくつと膨らんでいく恥丘  
苦しさをにじませながらも  
感じちゃっているシャロだった。



「ああ……見え隠れしてた赤ちゃんの頭がもう見えつばなしになってるよお」  
「はあつ……あとちよつとお……なんだあ♡」

「しつかり受け止めてあげるから、遠慮せず思いつきり出しちゃおうね♡」  
ぽっこり赤ちゃんの頭で膨らんだ恥丘お尻の穴まで広がりきっていた。  
「ああつ……はっ！出てきちゃうっ……ふうっ!!」

ぐぐぐつと、恥丘はさらに盛り上がり、膣口は内側から押し広げられていく。赤ちゃんの頭はどんどん外へとその姿を表していった。





「おおおっ……で、てるう……広がっちゃ……ほおおおっ♡」  
「こっそりいじつていた乳首からの母乳と一緒に  
赤ちゃんの頭がぼこんつと飛び出した。  
「おお、すごいよっ……」

「はあぁんツ♡おっぱいいいじつちやダメえ  
赤ちゃんにあげる分がなくなっちゃ……  
イくら……赤ちゃんにこりこり産道こすられて  
おっぱいいいじられてえっ♡」



「どうやら、シャロにとっては、出産は  
気持ち良い思い出になってくれそうだね♡」

「はひいら……苦しんだけど  
気持ちいいのお♡癖になっちゃいそう……」

♡

♡

♡

♡

♡



「見えるかい？ポクたちの赤ちゃん♡」  
「あはあ……私たちの赤ちゃん♡出てきてくれたあ♡」  
頭が出てきてからは身体が出てくるのはあつという間だった。  
たちまちするりとでてきたもので、  
ポクはあわてて、手でしっかりと包み込んだ。

「あつ……」  
その存在を知らせるかのように元気に産声を上げ始める。  
まるで、ポクたち3人になった家族の  
新しい門出を告げるかのように……

